# ピリカ遺跡ボランティアだより

平成 21 年度号（第9号）　　発行日　２０１０年５月１５日

## 追悼 奥田八平前会長

丸　山　良　祐

辛い役目が回ってきました。

一昨年暮れに肝炎を悪化され入院されたときは養生すれば復帰されると思っていました。見舞いに行くと、ボランティアの会長の後継を気に掛けておられた。

自分の状態を悟っておられたのでしょう。

でも私は八平さん以外に適任者はいない、回復するのを待つよ。

励ましたつもりだった。

結局、次の総会で八平さんの後継を引き受けた。報告をしたら重荷が降ろせたと喜んでくれた。本当に責任感の強いひとだ。

八平さんと私は人生の選択が似ていた。

北海道で牧場を経営するという夢をもっていた。それぞれに違う場所で牧場に挑戦していた。何だか変な奴が居る。そんな噂はお互いに耳に入っていた。尋ねてみると言葉も生活の仕方も酒好きも牛の苦労も殆ど同じだった。

家族で付き合いだしたら温泉好きまで一緒だった。八平さんは一枚上手で、迷路のような道の奥の温泉までも連れて行ってくれた。

八平さんが倒れる一年前、ボランティアの会は函館で勾玉づくりの指導を頼まれた。次の日、南茅部の道路予定地から発見された竪穴式住居跡群を見学するために南茅部の温泉ひろめ荘で泊まり、懇親会をした。八平さんとここに来るのは三度目だった。来る度に季節と温泉設備は変わってるけれど、「ふぁ～ええ湯やな」癒しの言葉は変わらなかった。

「もう一度行けるかな」

「行きたいな」

ベッドの上の八平さんと話したのだった。

翌年 10 月、私は腰の手術のため函館へ、八平さんの病院の近くにいたけれど、一度も連絡を取れなかった。

私は 17 日再手術だった。

18 日、集中治療室で八平さんの訃報を受けた。

旧石器のボランティアの会が発足以来会長として筋道をつくり、発展させてくれました。

本心はまだまだこの会に心を残していることでしょう。

安らかに眠ってください。と言ってもじっとして居ないことでしょう。千の風になって大空からいつまでも見守ってくれるのではないか。そんな気持ちになっている。

合掌

## 八平さんのこと

寺　崎　康　史

八平さんのことを初めて知ったのは、町民センターの 2 階において八平さんたちが作るハム・ソーセージのお披露目式があった会場だった。確か 1987 年か 88 年のことだったと思う。それから、どちらからともなくソーセージに石製ナイフを付けてセットで売り出してはなどと話し合うようになった。1990 年頃からは石器づくりセミナーにも毎年協力してくれるようになり、いろいろなアイディアを提供してくれた。特に豚をまるごと一頭手に入れ、石器で解体したことは今でも鮮明に思い出される。また、八平さんは保存食に大変造詣が深く、肉の解体から保存までその取扱いにおいてはかなりの知識を有していた。まさに生ける旧石器人だったのだ。

家にも何度もお邪魔した。奥さんとお嬢さん３人との日進での暮らしぶりは、さながら海外テレビドラマ「大草原の小さな家」を彷彿とさせるものであった。父親としての八平さんは逞しかった。

その逞しかった肉体に病魔が宿ったのは

いつ頃からなのだろう。きっと痛みがあったのだろうけれども誰にも言わなかったのだろう。八平さんとはそういう人だ。自分のことについてはあまり語らないのだ。幼小のころは京都大学の構内が遊び場だったこと、奥さんと南米を放浪していたこと、友人が山で遭難し、救助にいったこと。もっと聞きたかった話があるけれども今はもうそれも叶わない。でも、旧石器文化館に行けば動く八平さんを見ることができる。ガイダンス映像の中で、雪原で鹿肉を切る男が２人出てくるが、右側が八平さんだ。よく見ると何か語りかけている。もちろん音声は出てこないけれど、私にはこう聴こえる。「もっとしっかりやらねえと駄目だぞ」と。その独特な優しいイントネーションで。

# 火おこし体験

小田島　輝　志

今年の遺跡まつりでは、「火おこし体験」の応援をした。

火おこしというと、テレビでオーストラリア原住民のアボリジニが原始的な方法で火をおこしたのを見たことがある。両手で棒を挟み、交互に回転させてその摩擦熱で火をおこすというやり方だが、彼らはわりに簡単に発火していた。彼らの住む地域は乾燥地帯で、火がおきやすい自然条件にあり、また日常的に火をおこしているので、その「コツ」を熟知しているのだろう。

ところで人類はいつごろから「火」を用いたのだろうか？ネットで調べたら 50 万年くらい前の原人（北京原人）による火の使用の痕跡が中国で見つかっているという。火を使えば、暖を取れるし、夜の明かりとなるし、猛獣をさけたり、食べ物を加熱したりでき、結果として人類の体質と大脳の発達を促したという。

火はこのように原人の生活を大きく変えたが、その火おこし体験を今回のピリカ遺跡まつりで味わった。火おこしの方式はいろいろあるが、今回は文明の利器を駆使した「マイギリ式」というやり方。写真のように、ハズミ車の反動を利用して回転を得るもので、江戸時代の発明という。その動力源はあくまで人の力によるもので、大変疲れる。その結果、すぐに火がおきるかというとそう簡単ではない。

煙は出るが、発火までには至らない。競馬に例えれば、最後の直線の追い込みで落馬したようなもの。火種を消さないようにして火口の中に落とし、息を吹きかけ、発火させる点が最大のポイントである。これをマスターして初めて発火に至るのである。

私は５回ほど挑戦したが途中で息切れをしたり、ヒキリ板から棒がはずれたりし、最後の２回でやっと成功した。内１回は宮本学芸員が巧みに火種を火口に移し発火に導いてくれたもの。火をおこすということは、至難の業なのである。

この体験には、小学生とその親たちが参加し、最初は子どもたちがやるのを親がじっと見ていたが、やはり自ら体験したくなり、汗をかきながら何とか火をおこそうとしている親の姿に子どもたちが声援をおくっていた。それが何とも微笑ましく感じた。

以前にも書いたが、このようなピリカにおける各種の体験は、現代のデジタル社会にありながら、アナログ社会の素晴らしさを示してくれる一面を持っている。同時にピリカ遺跡はかけがいのない今金への歴史上の贈り物であり、今後もこのような事業を通じて郷土の歴史に触れるチャンスを町民はもとより他町村の人々に体験してもらえたらと思う。

今金は何もないところとよく耳にするが、そうではない。ふんだんにすばらしい自然環境（農業環境を含む）と遺跡があり、ピリカの歴史はまさしくわが町の偉大なる財産だと言える。

**参考資料**

岩城正夫 1977 年『原始時代の火～復元しながら推理する』新生出版
フリー教科書「ウィキブックス」

# 熱気球体験で愛と幸せを

西　村　雪　子

今年のピリカ遺跡まつりには、なんと熱気球がやってきました。

平成 21 年７月 26 日（日）、この日はいつ雨が降るかわからないようなお天気で心配でしたが、風はなく、予定どおり午前 11 時から気球を上げることになりました。時間が近づくと、文化館前の駐車場はいつの間にか「満員御礼！」。入れなくて辺りに停める車もあり、美利河でこんなに車が集まったのは、いまだかつて見たことがありません。

遺跡にあがると、気球がこんなに大きいものだとは思いませんでしたが、とても楽しみになってきました。いよいよ乗船という時、偶然、外崎町長さんと一緒に乗ることになりました。カゴの背がとても高いので、足をかけて乗るのが大変なこと！町長さんが「愛の手」を差しのべてくれ、なんとかカゴの中に入ることができました。30m の高さまで上がると、美利河の全景が見渡せ、空気の美味しいこと！「このままスーッと天国に行きたい気分！」と言うと、町長さんが「まだ天国に行くのは早いよ」と言われ、大笑い。元首相の小泉さんではないですが、「感動した！」の一言です。カゴから出るときは、町長さんにおんぶまでしてもらってようやく地上に舞い戻りました。私はまだ天国には行きません。

このたびは、町長さんをはじめ、熱気球のスタッフの皆様、熱気球を呼んできて頂いたマザーピリカの方々、大変お世話になり、ありがとうございました。

森と湖、きれいな空気の美利河はとても良いところで、美利河の魅力をあらためて実感した一日でした。もっと多くの方に美利河での楽しい体験と感動、そして愛を味わって幸せな気分になってほしいと思います。私も来るときには愛と幸せを届けたいと、今から楽しみに待っています。

# 会主催の革細工教室を開けたことに感動

森　田　誠　子

平成 22 年２月６日（日）、神丘地区の旧校舎で、一瞬建物が揺れるくらいの猛吹雪のなか（陽ざしもあったかな！）、講師、山崎康直先生指導のもと多くの参加者で開催されました。外は強い風とふるふる雪で視界ゼロ状態！でも教室の中は生き生きとした顔々と熱気むんむん、10 才～70 才くらいまでの年齢差が感じられませんでした。

手伝っている会員も、医療器具のように並んでいる道具の扱いがわからず、先生に聞いては走り回って終わったような気がしました。でも少しだけ革細工とは、が見えてきました。

革細工を通して旧石器文化を深く考えられるような気がします。人類が石器を手にした時から間もなく、毛皮を体に巻きつけたのではないかとか、あれこれ想像すると目が冴えて眠れなくなりました。

勾玉づくり、革細工と、体験学習のお手伝いしながら、大切な旧石器文化といつまでも関わっていけますようにと思っています。このたびは充実した時間をありがとうございました。

# 思い出いっぱい
# ピリカ遺跡ボランティア

森　岡　楊　貴

ぼくは、６年生の時に、歴史がすっごく好きになって、ぼくもお金を使わないで自分でとったり、つくったりした物で生活してみたいと思うようになりました。歴史の教科書にはまが玉もヤリものっていました。まが玉を初めてつくったときは、上手く角がとれなかったけど、２回、３回とやるうちに角がとれて、まが玉らしい形になりました。この時、楽しいと思い、やりもつくってみたいと思うようになりました。そして、ヤリをつくる日になると、朝からウキウキしていました。今までやりなどつくったことも、見たこともなかったからです。黒よう石をたたいてとがらせ、裏から切ってきた木の太い枝に組み合わせてつくりました。使ったことがないから、何かビニール袋など、試しにつついてみたいです。

そして三内丸山遺跡に行ったことが思い出に残りました。歴史の教科書にものっていて、行ってみたいなぁ、六本柱をみたいなぁとずっと思っていました。それをこの目でみて、とてもうれしかったです。ふつうなら行けなかったところに行けてとてもうれしいです。

ピリカ遺跡ボランティアのみなさん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

## ボランティアもすごい
# 青森・三内丸山遺跡

宮　本　雅　通

平成 21 年９月 12・13 日、本会としては初めて津軽海峡を越え、縄文時代の大規模な集落跡として有名な三内丸山遺跡を見学しました。

参加した 14 名（大人 12 名、小学生２名）は、まず教育委員会のバスで函館駅まで移動、その後ＪＲで海底トンネルを通って青森駅へ。駅から市営バスに乗り継いで三内丸山遺跡にたどり着きました。

事前にボランティアガイドを申し込んでいたので、施設に到着するとご丁寧な歓迎があり、他の一般見学者と一緒に一人の女性ガイドさんに案内していただくことになりました。ガイド専用の携帯メガホンで、聞いていると十数年は経験があるような口調で案内が始まりました。説明の中で、専門的な難しい言葉は、「例えば現代ではこのようなものだ」とか、研究者の間でも意見が分かれていることを話した上、自分の意見も少し披露してみたりとか、見学者の立場に立ったとてもわかりやすい、丁寧な案内でした。

多い時では一日で数千人もの観客があるというこの遺跡公園。一人で 300 人の修学旅行生をさばくというボランティアガイド。青森市という豊富な人材環境。いずれもピリカとは全然状況が違います。会の皆さんには、これは一つのお手本として理解し、ピリカの実情にあったやり方でボランティアを楽しんでいただければと思います。

**ピリカ遺跡ボランティアだより（No.9）**
発　行：ピリカ遺跡ボランティアの会
発行人：丸　山　良　祐
〒049-4333 北海道瀬棚郡今金町字美利河
Tel.0137-83-2477（ピリカ旧石器文化館内）